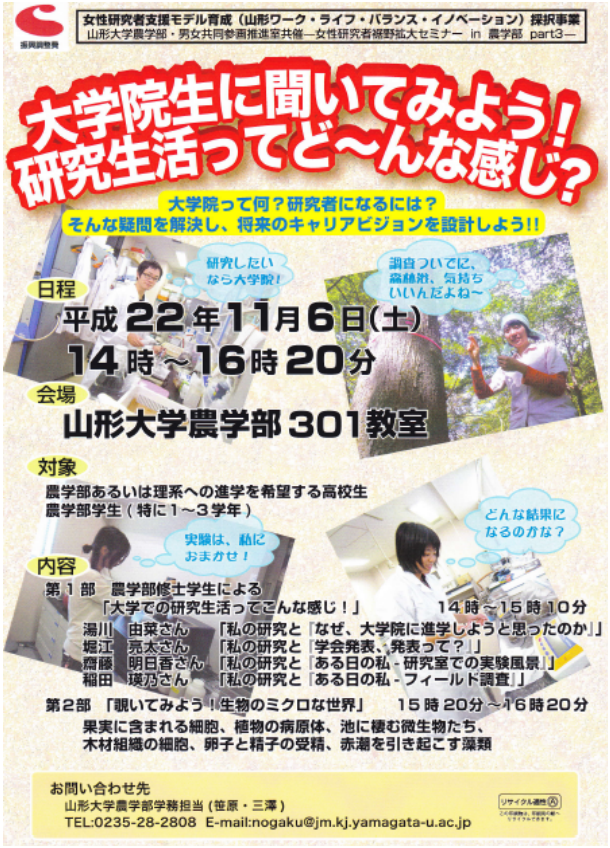
４．女性研究者の裾野拡大

４－１．女性研究者の裾野拡大セミナー

女性研究者の裾野拡大を図るため、平成 22 年度は全学に女性研究者の裾野拡大セミナーの開催を呼びかけ、理学部２回、農学部１回、人文学部１回、工学部１回の合計５回の女性研究者の裾野拡大セミナーを開催した。

学部によって大学生を対象とするセミナー、高校生を対象とするセミナーなど、セミナーの対象として呼びかけた層は様々であった。しかし、どのセミナーも各研究者の研究の内容に加え、研究者を志した動機や研究者としてのワークライフバランスの取り方など、研究の魅力の説明と研究者としてのライフスタイルについて学生に語る機会となった。セミナーには､合計 300 人以上の参加者があり､研究の魅力を伝える効果的な機会となった。各回の内容と結果は表の通りである。

セミナーを実施する上で、「女性研究者の」と題しているため、男性が参加を躊躇する面が見られ、このセミナーは男性も歓迎なのだということをもっと大々的に宣伝するべきだったとの反省点がみられたが、次年度は、女性の参加者を募ると共に、男子学生の参加も歓迎する旨をピーアールしていく必要がありそうである。



「人文学部 OG が語る日本近代文学研究」

女性研究者裾野拡大セミナー

日時：２０１０年１１月２日（火）午後１時から午後２時３０分まで

場所：人文学部一号館　１０２教室

講師：

[illegible]　（仙台文学館 学芸室長）

[プロフィール]

東北大学大学院文学研究科単位取得退学、修士（文学）

専門領域：泉鏡花を中心とする日本近代文学、東北／宮城の地域文学

[illegible]　（秋田工業高等専門学校 講師）

[プロフィール]

名古屋大学大学院人間情報学研究科単位取得退学、修士（文学）

専門領域：日本近代文学（岡本かの子）、ジェンダー研究

プログラム：

講師からご自身の日本近代文学研究の概要、研究者を志した動機などについてお話しいただき、その後、参加者との質疑応答を行う。

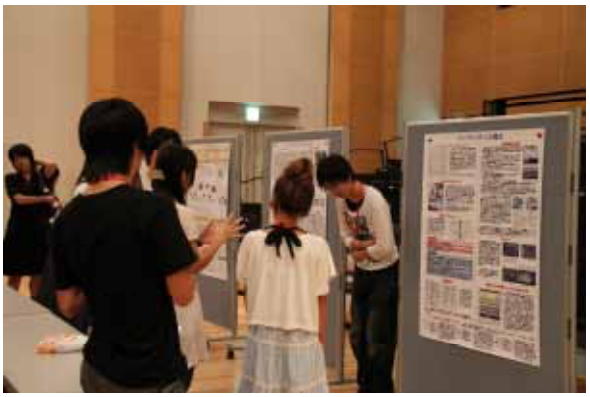
主催：山形大学人文学部　　共催：山形大学男女共同参画推進室

	日　時	タイトル	内　　容	結　　果
人文学部	2010年11月2日（火）	人文学部OGが語る日本近代文学研究－女性研究者裾野拡大セミナー－	人文学部の卒業生で女性研究者として活躍中の方を講師とするセミナー。	参加者数：42名、（内訳　学生36名、教員4名、職員2名） 山形大学人文学部卒業生で研究者として活躍しておられる赤間亜生氏（仙台文学館 学芸室長）と水野麗氏（秋田工業高等専門学校講師）を講師に迎え、ご自身の日本近代文学研究の概要、研究者を志した動機などについて講演後、参加者との質疑応答を行った。
理学部	2010年9月7日（火）	女性研究者の裾野拡大のための公開講座及びパネルディスカッション－ナノプランクトン研究について－	高校生・大学生等を招待し、女性研究者の裾野拡大のため、国際的な研究の第一線で活躍している女性研究者からナノプランクトンの研究の基本から発展までを通したパネルを用いて、研究の面白さなどを直に伝えてもらう。	参加者数：不明、講師：原田尚美（海洋研究開発機構）：女性研究者のライフサイクル 富田（萩野）恭子（岡山大学）：研究という仕事、Denise Kulhanek(米国国立科学財団ポスドク)：ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸの楽しさ　他2名 女子高校生・大学生が主な対象者であるということで、それぞれの講師が自分自身の研究者になるまでの道のりを語った。大学進学での挫折が新たな出会いにつながったこと、就職の内定を断って大学院に進学したこと、南極観測船では男性200人中、女性1人だったことなどの話は高校生の関心を引きつけ、その後の質問も活発に行われた。
	2010年11月19日（金）	「次世代を担う女性研究者による未来予想図～元気な女子が世界を変える～」	山形に縁の深い新進気鋭の女性研究者による生き生きとした姿を通して、理系女子の可能性を認識する。	参加者数：115名、（内訳 高校生90名,高校教諭6名,大学生・院生11名、大学職員8名） 山形に縁の深い新進気鋭の女性研究者4名による生き生きとした講演（実習を含む）を通して、若い世代の女性に理系進路への可能性を再認識してもらう。県内女子高からの参加希望が、当初想定していた人数を遥かに超える程の反響があり、課外授業の一環としての開催となった。参加者の感想には、女性が活躍する時が来たことを実感したとの声が多く寄せられた。参加した女子高からは、次年度も是非とも開催して欲しいとの要望をいただいた。本学関係者にとっても、大学を巣立っていった女性研究者の活躍ぶりに直接接することが出来たことは、女子学生への進路指導の参考となった。

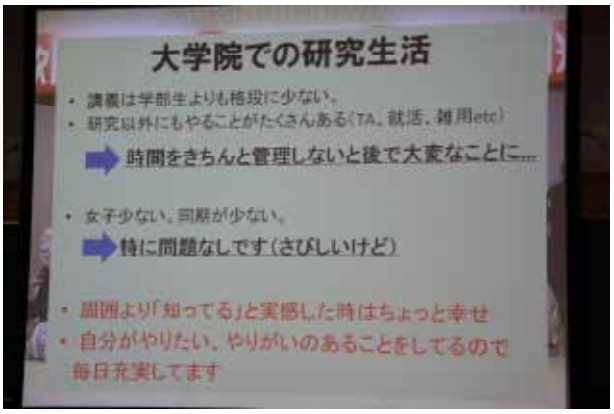
工学部	2011年1月19日（水）	目指せ！理系マドモワゼル！～理系女子力up セミナー～	女子学生が肩肘張らずに研究をやっていけるモチベーションを作るため、現在活躍している新進気鋭の女性の先生や先輩方の研究等を伺い、参加者の皆さんで理系女子について考える。	参加者数：65名（内訳　高校生12人、大学生・院生38人、教職員15人、男性は1/3程度） 先生方の招待講演と、日常で撮影した写真を参加者に示しながらエピソードを紹介し、日常的に考えていることをお話していただくセミナーを開催した。 アンケート結果を見ると、参加者は招待講演とセミナーに楽しんで参加できたようで、「親近感が沸いた」「研究者についてのイメージが深まった」など、好意的な意見が多かった。問題点としては、セミナーの題目の一部に「女性研究者支援」など、少しでも女性のためのというニュアンスが含まれると、男子学生や男性教職員が参加しにくくなるようだ、ということだった。
農学部	2010年11月6日（土）	大学院生に聞いてみよう！大学での研究生活って、どんな感じ？――女性研究者裾野拡大セミナーin農学部part３	本学農学部への進学を検討している高校生および研究室配属前の前期学部学生を対象とし、農学研究への興味関心を高めることを目的とする。特に、本企画は、大学院への進学率の低い女子学生を念頭に置き、女子学生の修士課程への進学率の向上を目指す。	参加者数：60名程度（内訳：高校生・大学生、高校生保護者） 目的：大学院修士課程学生により研究室での学生生活を紹介することで、学部後期教育課程の雰囲気を理解し、農学研究への興味関心を高めること 第１部　農学部大学院修士学生(4名)による「大学での研究生活って、こんな感じ！」 第２部　覗いてみよう！「生物のミクロな世界」 今回は司会進行も含め、学生AA主体で行った。実際に現在学んでいる修士学生による、自身の研究内容、生の研究生活、大学院に進学した経緯などのプレゼンテーションが、非常にわかりやすかった。今回のセミナーは、発表者や運営に関わったAA学生にとっては、一般の方に自分の関わっている仕事を説明するよい機会であり、勉強になったと考えられる。

女性研究者の裾野拡大のための公開講座及びパネルディスカッション

ナノプランクトン研究について



大学院生に聞いてみよう！大学での研究生活って、どんな感じ？



目指せ！理系マドモワゼル！～理系女子力 up セミナー～

目指せ！理系マドモワゼル！～理系女子力 up セミナー～

人文学部 OG が語る日本近代文学研究

次世代を担う女性研究者による未来予想図～元気な女子が世界を変える～

４－２．基盤教育「ウーマン・オブ・ヤマガタ」

これからの社会の担い手である学生が、多方面で活躍する学内外の女性たちとの対話を通して自らのキャリア・ビジョンを描くことをねらいとして、主に学部の１年生を対象にした基盤教育授業を開講した。性別役割分担を見直し、男女とも仕事と生活の調和（ワークライフバランス）が保てる働き方ができる社会について考えた。

4-2-1.平成 22 年度講師一覧

	月　日	講　師	所　　属　　等
1	10 月 12 日	加藤　水希	山形銀行地域振興部経済調査グループ所属。今年 3 月「働く女性と女子大学生の交流会」を自主企画。
2	10 月 19 日	加納　寛子	山形大学基盤教育院准教授。情報リテラシー・情報モラルを研究。ネットいじめ対策にも取り組む。
3	10 月 26 日	新関さとみ	さとみの漬物講座企業組合理事長。平成 22 年度男女共同参画「女性のチャレンジ賞」（内閣府）受賞。
4	11 月 2 日	鈴木　匡子	山形大学大学院医学系研究科主任教授。専門は高次脳機能障害学。脳損傷後の障害を分析・研究。
5	11 月 9 日	高塚由美子	山形大学大学院理工学研究科助教。2003～2009 年カリフォルニア大学で分子細胞生物学を研究。
6	11 月 16 日	木村　松子	山形大学男女共同参画推進室チーフコーディネーター・准教授。専門は学校教育学。
7	11 月 30 日	木村　直子	山形大学農学部生物資源学科准教授。卵の老化現象の解明や家禽類の雌雄産み分け技術等を研究。
8	12 月 7 日	長谷見晶子	山形大学理学部地球環境学科教授。地震波形の特徴を利用した研究や震源分布を調査。
9	12 月 14 日	齋藤由美子	山形県男女共同参画センター・チェリア企画係長。男女共同参画推進の様々な企画を立案。
10	1 月 11 日	坂本　明美	山形大学地域教育文化学部附属教職研究総合センター准教授。教育方法学、特に「フレネ教育」を研究。
11	1 月 18 日	高橋菜穂子	平成 21 年に国立ファーム株式会社　山形ガールズ農場（村山市大槇）を設立。

受講生は 23 名（女性 12 名、男性 11 名）、年齢は 18～21 歳で学部 1 年生が多い。受講動機として多いのは、男女共に「自分自身の考え方の幅が広がり人生に生かせる。」「自分が生きる参考にしたい。役に立つものが得られる。」であった。女性の中には、「女性の話を生で聞くことができる。人生観を聞いてみたい。」という期待も多くみられた。

講師の年代は、20 歳代から 50 歳代までで、未婚・既婚者が半々、育児経験者も半数である。学内研究者 7 名（全学部と基盤教育院から各 1 名）、学外者 4 名（企業勤務・起業家・海外青年協力隊経験者・農業経営者）である。現在、妊娠中という方もおられた。

主に、自身のキャリア形成過程について学生時代から現在までを語っていることから、興味深く引き込まれる内容であった。全学部等の研究者から研究に関わる話があり、研究の面白さと同時に、挫折や困難も語られ、学生にとって共感できる話も多く聞かれた。学部 1 年生の中には、大学や学部の選択等に後悔や迷いを抱いている学生がいるが、講師の経験談に触発されて質問や感想という形でそれが出され、対談の中でアドバイスを受ける場面が何回かみられた。

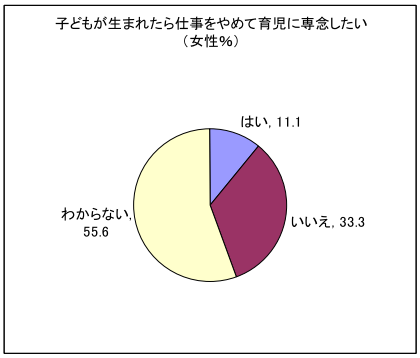
育児経験者から話を聞くことで、育児に対する思い込みがあったことに気づいた女子学生がいた。産休後の復帰のため、子どもを保育士に預けた時の安心感・解放感と職場に戻ってほっとしたこと、育児休業を取ろうとは思えなかったことが語られた時、どうしてそんな気持ちになるのか質問が出された。それに対して育児不安が大きくうつに近かったという説明がなされた。

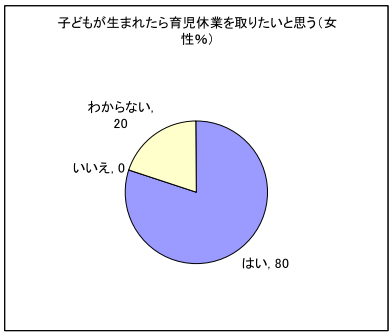
いろいろな分野で活躍している女性たちであるが、決してかけ離れた存在ではなく、同じような悩みや困難を経験しているが、総じて出会いが契機であったことや感謝が強調され、学生にとっても印象深いものとなっていた。

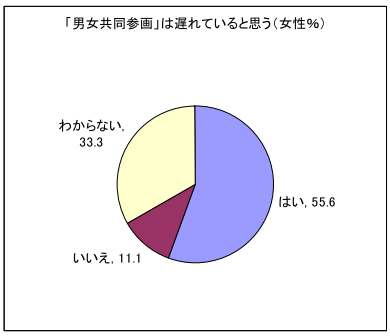
4-2-1.受講後の受講生の意識

（23 人中アンケート回答：女性 10 人・男性 9 人、年齢：18～21 歳）

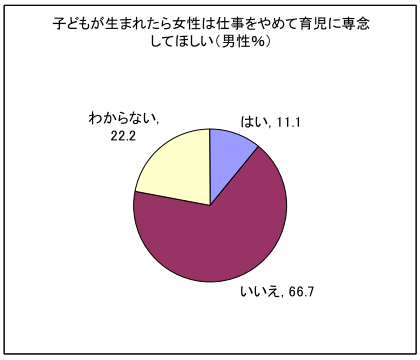
女性

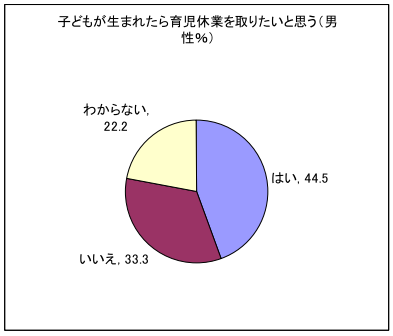


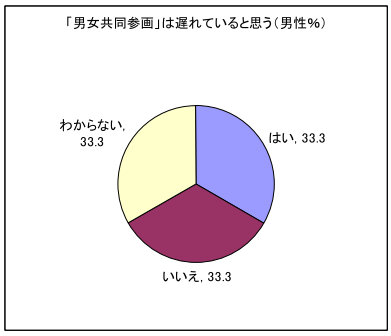




男性

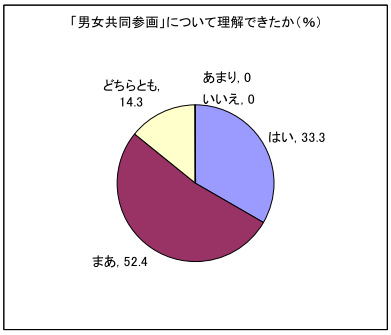


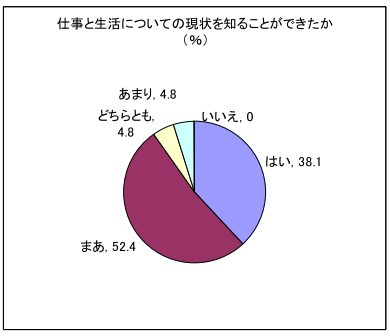


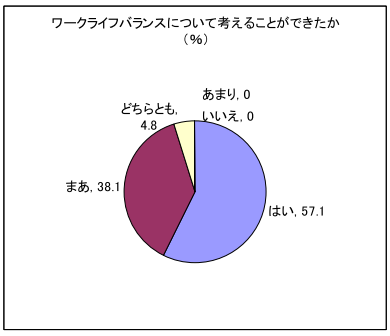


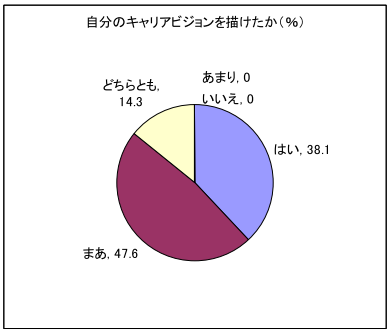
「将来、結婚したいと思う」と答えたのは女性 70%、男性 89%で、全員が結婚後も働き続けたいと答えている。しかし、子どもが生まれたら、女性が辞職して育児に専念する、とする学生が男女共 1 割いた。女性の辞職・育児専念を否定する男性が多かったが、育児休業取得までは考えていない男性が過半数である。一方、女性の方は、仕事を続けるのか育児に専念するのか「わからない」という答えが多かった。設問にも女性の問題として想定しているという問題があるが、若い世代においても出産・育児と仕事の継続の問題が女性の方に偏って起きてしまいやすいことが示されているといえる。

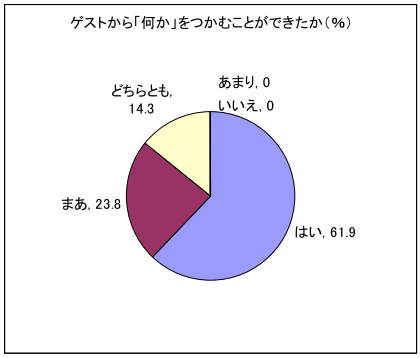
4-2-3. 受講生からの授業評価（グラフの数値は男女合計したもの）

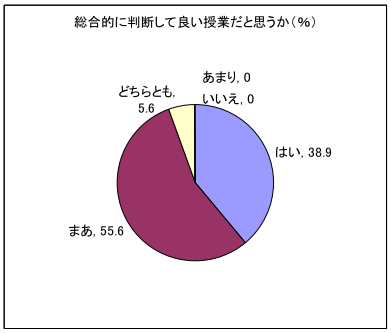












研究や仕事を続けてきた女性たちの経験、決して自分達とかけ離れたものではない悩みや喜びを聞くことで、「男女共同参画」や「ワークライフバランス」について共感的に考え、必要性を理解することができたといえる。